



女子短期大学
Women's
Junior College

イン・ザ・ロングラン

専攻科現代教養専攻1年 河野 未奈

初めての冬が訪れる。

未知のウイルスにより、これまでとは全く異なった生活を強いられた2020年。手探りの生活を気付けば1年近く続けていたことになる。アルバイトは禁じられ、友人と出掛ける約束も宙に浮き、大学にすら通えない。毎日膨大な量の課題に追われていたからか、2020年はなんだかあつという間だったように思う。

今年の4月と5月、私はほとんどの日々を家で過ごした。昨年の自分からは考えられないスケジュールである。大学、アルバイト、友人と過ごす事で忙しかった2019年はまるで夢のよう。春の陽気が気持ち良い2か月間、私は時折愛犬と散歩に出掛けた。散歩なんてしばらくしていなかったからか、嬉しそうに歩く愛犬の姿はとても印象に残っている。

籠っていた2か月間を、私は無駄だったとは考えていない。決して「良かった」とは言わないが、愛犬の笑顔という小さな幸せに気付いただけでも、大きな意味があったと感じる。

「あんな時もあったなあ」と話せる日がいつかきっとやって来る。今年のクリスマスのギフトは、「長い目で見える力」をお願いしようと思う。

あらためて、 真摯な祈りを

現代教養学科人間社会専攻 准教授
武田 美亜

今年はとにかくCOVID-19に振り回された。短大の授業は前期も後期も一部を除いて原則オンラインでの開講となった。私にとっては青山キャンパスで短大生と過ごす最後の年だったのだが、そんなことを噛み締める余裕もなく研究室を引き払うことになりそうだ。

感染症そのものも厄介だが、日本赤十字社が「第2・第3の“感染症”」と呼ぶ、不安などの精神的ダメージと、感染者や医療従事者に対する嫌悪や差別といった社会的問題が、ウイルス以上にじりじりと私たちの心を蝕む。

メールやオンライン会議で交わす挨拶では、「一刻も早く事態が収束することを祈ります」「次は対面でお会いできることを祈ります」など、何かしら「祈る」文言をつけることが増えた。実際、あとはもう祈るしかないと途方に暮れることもたびたびあったのだが、それにしても安易に「祈る」と言いすぎたかもしれない。

クリスマスにあたり、あらためて「祈る」という行為を丁寧に見ようと思う。



オンラインコンサート後に



グロリアスクワイア練習風景